

西金堂ハ、天平六年正月十一日、光明皇后御母橘公タチハナキミの氏タメの御為

に、たて給ひぬ。水鏡、本尊釈迦如来、二菩薩・羅漢ラカン・神王等シワウの、

像をすへられたり。釈書、此尊像ハ、印度健駄羅國王インドケンダラの后(健)

あり、生身の観音をおかみ奉らすハ、あらじとちかひ給ふに、御

枕上マクラカミに、人まミえて、日本の國王キサキの后クワウミヤウシ、光明子こそ、生身シヤウジンの観音

にてましませと告奉ると、おほえ給ひて、御夢ハさめたり。

此事臣下に仰ことありければ、群臣クンシン儀ギして、此人きたるべき人にあら

ず、后キサキ又ゆき給ふへきにあらず、只(議)そのかたちを、うつし奉らんに

ハしかじとて、巧匠コウセウを日本国にそわたされける。巧匠此土につ

きて、かくと奏聞ソウモンを經へる。光明皇后我母君の御為に、仏をつくりなん、

さいはひ汝刻キザミてえさせよ。則釈迦の像をつくり、眉間の玉を入なん

とせしに、像をのづからに光明をはなち給ひしかば、信仰シンカウムネ胸

にミち、感涙袖にあまりて、いやよしなしとて、玉をば入らずなりに

き、当堂の本尊是なり、扱光明皇后の御かたちを、うつし奉り、

もろこしにかへりけるとぞ、御順礼記、又自然湧出シネンユウシュツの観音の像

平家物語当堂トウドウにあり、抑此像ソモクザウハ、むかし、伝法院デンポウインの修円僧都シユエンとて

ありけり、寿広ジュクワウイカウ已講イコウを相ぐして、尾張ヲハリの国よりのぼられしに、

賀茂坂といふ所の、すがたの池のほとりにして、已講ヨコ々々と呼

声あり、誰にやとかへり見れども、人さらになし、又こなたにお

もむけば、呼ヨヒかへすほとに、いとあやしくて、こゑにつきて行ぬ

れは、田の中に十一面観音の像、いますにぞありける。ゆめ

うつゝともわきまへず、いだき上アゲ、背負セヲヒ奉りてぞ、南都にかへり

ける、先南大門にすへ奉り、いづれの堂にいらせ給ひなんやと、

大衆ダイシュ僉議ケンギして、金堂よりはじめ、扉をひらき入奉らんと

すれども、像おもくなり給ひて、千万人のちからにもかなひつ
へうもあらず、堂毎ゴトにうかへども、かろくもなり給はず、只西金
堂といふにぞ、いとかろくあからせ給ひしより、西金堂にすへ
られけるとぞ、盛衰記